たたかう若者たちとブラック企業の実態⑨

首都圏青年ユニオン委員長　神部　紅さん

貧困がチャンスを奪う

現在の日本では、貧困に晒されていたり「不器用」な人ほど、必然的に劣悪な生活環境・労働環境に組み込まれていきます。生きていくための「器用」さというのは、貧困の中では獲得されることが困難です。貧困状態のもとでは、幼い頃からの「挑み」であったり、成功体験を積んでいくことによって、何かをやり遂げる自信や、挑戦するチャンスというものが与えられていません。ですから、何かをやり遂げる自信も持ちづらく、「器用」に振る舞うことも困難になっていきます。実際にはさまざまな社会的要因が若者たちの生きづらさや「不器用」さというものを醸成していると言えます。

「助けて」と言えない若者たち

若者たちは、社会的な規範として「器用に生きろ」ということを強要され続けていますから、住まいや生活が脅かされるような事態になっても「助けて」と言うことができません。誰かに頼ることを「恥」と考える傾向を強く抱いています。点数や順序をつけられる競争主義的な教育の中に浸ってきたという問題もありますが、客観的に「それはおかしいよ」「何とかしなければ」というような問題が起きても「いや、大丈夫です」というふうに自分で抱え込んでしまい、周りに頼れない。明らかに追いつめられている状態であっても「自分で何とかします」「こうなったのも自分の責任なんだ」という気持ちを強く持っています。困っていてもそれがうまく表現できず、「助けて」と言えないことは非常に重い課題です。助け合いを本質とする私たちの運動にとっては、これを放置するわけにはいきません。どんなに私たちが「たたかえ」「立ち上がれ」と若者たちに迫っても噛み合わないわけです。声をあげたり怒ったりすることが「普通じゃない」という雰囲気は蔓延しているわけです。

下から上へ広がる無力感

こういった雰囲気が若者たちの中に広がり続けていけば、若者たちの社会的な怒りは見事に遮断されることになります。怒りの声をあげない、「助けて」と言えない人がどんどんつくり出されていけば、声をあげられない当事者たちは社会的には抹殺されることになります。こうして「あきらめ」は下から上へと広がっていく状況になっています。下から広がっている無力感に立ち向かっていかなければいけないと私は考えます。つまり、具体的に実践的に下から組織をしていかなければ、こういった無力感―立ち上がらない、たたかわないといった若者たち―は自ら変わらないし、克服もされないと考えています。

全員参加型で団体交渉

首都圏青年ユニオンは全員参加型の運動スタイルを重視しています。「声」の出し方を実践的に学ぼうと「発声練習の場づくり」として、団体交渉も全員参加を呼びかけています。組合員のメーリングリストに「交通費を往復3千円まで全額出します」「団体交渉をやります」と流せば、多い時は20人ぐらい集まるわけです。そして、みんなで寄ってたかって団体交渉をやる。会社は当初は1人の問題だと軽く考えているのですが、たくさんの若者の姿に驚きます。そういう活動を通じて組合員は労働組合の組織力を知ることもできます。もう1つのメリットは仲間が参加して共感してくれることです。当事者は不安な気持ちで交渉に参加しますが、連帯感・安心感を持って交渉に向き合えるようになります。

参加型の団体交渉なので、目の前で労使交渉やトラブル解決が展開されていくので、プロセスや手法、労働組合の役割や力というのを体感して学び取ることができます。こうして1人だけの経験ではなくて、全体で経験を共有しています。また、団体交渉に参加できなくても、その感想や報告をメーリングリストで流して共有していくことも大事にしています。交渉後は参加者みんなで感想も出し合い「よくがんばったね」「おつかれさま」と声をかけあっています。私をはじめ専従のスタッフが団体交渉をすすめることが多いので、組合員は何も言わずにその場にいるだけですが、首都圏青年ユニオンの場合は、団体交渉をやればほぼ勝利することができるので、小さくても勝つという経験をすることができます。とくに団体交渉という直接的な経済闘争の場面で、経営者や会社側の弁護士、社会保険労務士と交渉して勝つということは、パワハラやセクハラなどひどい目にあっている当事者にとっては、状況が劇的に変わることになります。「働きやすくなる」「職場に残れた」「うれしい」となるのです。労働相談の段階では「うちの会社はすごい弁護士がついてるから無理です」とか「経営者がパワハラ体質なので絶対変わりません」と言っていた当事者もびっくりするのです。

さらに、参加している組合員も何もしていないんだけども、その場に参加したことによって当事者から感謝をされるので、「参加して良かった」と感じる。さらに言えば、ここにまんざらでもない自分との出会いもあるのです。

体験を通じて社会は変わると実感

こうした体験が自分の中で少しずつ醸成されていくことで「自分たちが困っていることや『助けて』と思っていることを口に出して言ってもいいんだ」「主体的に動けば少しずつだけど社会は変わるんだ」ということを肌で感じられるようになります。こうやって誰か任せにせずに、主体者として前向きな変化を体験していくことができるのです。

タイやアジを釣って大満足、新鮮な魚に舌鼓

府職労海釣り大会＆バーベキュー

９月26日、和歌山県加太で船を仕立てて釣り大会を行い、その後、キャンプ場でバーベキューを行いました。

船釣りは、初心者からベテランまで16名が楽しみ、タイやアジをはじめ五目釣りを楽しみました。

その後のバーベキューには、新しく参加者も加わり21名で楽しみました。釣ったばかりの魚を刺身や煮つけ、焼き魚などにして食べることができました。

参加者からは、「朝早くからの釣りは大変でしたが、船に乗っての釣りはすごく豪快で楽しかった」「普段、釣れない魚が釣れて興奮しました」「釣ったばかりの魚はおいしかった」「職場が違う多くの人と交流でき、貴重な一日になりました」などの感想が寄せられています。

【参加者の感想】　今回、釣り大会に参加しました。船釣りをこれまで経験したことがなかったので最初は参加するかどうかかなり悩んでいたのですが、新しく府職労に加入した青年の方々からの後押しがあったため参加を決めました。

「当日朝４時に加太港を出港」という滅多に経験できないようなスケジュールではありましたが、素晴らしいほどの好天でまさしく釣り日和で、釣果についても鯛・鰺などさまざまな魚を釣ることができ、参加者全員で楽しむことができたと思います。

今回、このような素敵な行事を計画していただいた組合の諸先輩方、そして参加するかギリギリまで悩んでいた私の背中を後押ししてくれた青年組合員の仲間に感謝したいと思います。

中村亮太さん（中央府税）

映画鑑賞券

2015年12月12日（土）ロードショー

山田洋次監督作品　**母と暮せば**

吉永小百合　二宮和也

終戦70年、山田洋次監督が作家・井上ひさしさんに捧げて、長崎を舞台に描く、やさしくて悲しい、山田洋次監督初のファンタジー。

母親・伸子役には吉永小百合、息子の浩二役に二宮和也、浩二の恋人・町子役には黒木華というキャスティングで、山田洋次監督が初めてつくる、やさしく泣けるファンタジー作品です。鑑賞券は、全国共通券です。

前売券1400円（当日券1800円）→　**特別価格890円**

希望の方は必要枚数（組合員１人５枚まで）を府職労本部、もしくはお近くの府職労役員まで　〔取扱期間：12月10日（木）まで〕

クロスワード　9月号の解答と当選者

答え＝戦争の備えより防災

当選者

佐佐木一仁（用地室）
大高　律也（北部流域下水道事務所）
吉谷　眞孝（南部流域下水道事務所）
鶴田　静枝（枚方土木事務所）
新海　直子（岸和田保健所）

再生紙を使用しています。